

第一回足尾視察旅行記事

年一回位吾等土木家に参考となるべき事業を見學の爲め視察旅行を爲さんと云ふ議が起り今や本會も已に設立後一年有半を経過し時も青靄縹霞野に山に綠戰紅酣にして旅行には好適なる折なれば此際之を決行する事にし其目的地を足尾銅山とした足尾は近時異常の發展を遂げ鑛業に於ては最新最善の方法を應用し且つ亦東京よりの距離も土曜日曜を利用しての一泊掛の旅行には最好の適地なるを以て第一回視察として之を選定した

日程は五月六日土曜の午後二時三十分上野を發し足尾一泊七日午前中視察を遂げ午後三時足尾發の汽車にて歸京の事にした汽車は東部鐵道管理局の岡田博士を煩はして專用のボーギー車一臺を一行の用に供する事が出來た

六日の午後上野驛に參集の會員は左記の三十六名にして古市石黒野村の三博士と本間英一郎君の四人は途中館林の躑躅を賞さんとして本朝先發して本夕足尾に一行に加はる事になつた

- | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|---------|--------|
| 稻垣兵太郎君 | 井上秀二君 | 西田辰次郎君 | 岡田竹五郎君 | 岡田熊次郎君 | 岡崎芳樹君 |
| 小川織三君 | 小野諒兄君 | 大河戸宗治君 | 狩野剛太郎君 | 金古久次君 | 笠井愛次郎君 |
| 吉村惠吉君 | 辰馬鎌藏君 | 田川正二郎君 | 玉村勇助君 | 曾山親民君 | 直木倫太郎君 |
| 那波光雄君 | 南部常次郎君 | 村幸長君 | 上野有芳君 | 牧野雅樂之丞君 | 福田次吉君 |
| 小柴保人君 | 近藤虎五郎君 | 安齋杏一君 | 佐藤四郎君 | 坂牛義任君 | 彭城嘉津馬君 |
| 名井九介君 | 瀧口三始君 | 生野圓六君 | 廣井勇君 | 杉野茂吉君 | 杉谷幸藏君 |

之に吾等一行を東道の爲に特に足尾鐵道會社の川地喜三郎君と土木學會囑托書記の石川元次君東福寺正雄君谷守衛君を合せ總計四十名の團體である斯際足尾の小田川博士が特に吾等一行を見送る爲に此處に來られたるは大に感謝する處にして又同博士が事故の爲に一行に加はつて吾

等を嚮導する事能はざりしは深く遺憾とする事である

發車前の小閑を費すの嬉戯として室前設置の體重器に載つた同勢四十餘人の紳士が争ふて體重器に乗るのを見て他の待合客は目を瞠つて行つた狩野君の十八貫を最大として那波君の十一貫を最小とする記者の十二貫は窃に後殿たるを畏れて居つたが那波君を獲て聊か意を強ふした會員は白薔薇職員は赤薔薇の徽章を左衽に着けて一同車中に腰をかけた時は初めて旅と云ふ情緒に漂ふた或人は黄色の手拭を頸部に纏つたら眞個に團體旅行の情趣を味ふべしと言つた王子赤羽を過ぐる頃より窓外の綠葉漸く樹頭に影を作り畑には麥已に延ぶる事尺餘五形花の其間に紅氈を布けるが如き地上の萬物皆新緑の爽やかなる色に生くるの想があつた

荒川を渡る頃車窓より其改修工事の築堤を望見し名井君の説明に由つて其梗概を知り得たのは一同の幸福であつた尙車中にて川路君より足尾銅山案内地圖及び足尾鐵道繪葉書を配布され又一行中の會員玉村君よりは同君特許架空鐵索の説明書を一同に贈與された須臾らくの間は是等冊子の繙讀に沈黙の時間が續いたが其後は相互久瀾の挨拶より始まつて歡談奇譚各處に交換され或は君は誰なりしや常に顔容は熟知せるも姓名を知らざりしと謂ふあり或は左隣の友人に某君は何處に居るやを問ひ君の右隣は即ち其人なりと告げられ赧然たる者あり修學旅行時代に滞在せる土地を通過しては當時の失敗譚を語るあり某々老博士の如きも壯時の珍談を白狀して意氣軒昂たるあり一車借切の團欒は恰も一茶亭に於ける談話會の如く一時は身は進行の汽車中に在るを忘るゝの思ひがあつた

珍談奇譚にも稍倦怠を覺ゆるや直ちに行厨を開くべしと云ふものあり或は尙ほ早しと唱ふるものあり纏て兩毛線に入りてより早急説勝を制して携ふる處の洋食行厨を開き酒壇の栓を抜けば忽ち玉杯左右に飛び又賑かになつた桐生驛に到れば足尾より特に出迎はれたる會員中村元君及

次鑛業所員近藤太郎君あり一同の感謝措く能はざる處であつた此處より愈々足尾線に入る頃は豊頬紅艶を潮し陶然として微醺を帶ぶあり今迄沈黙を守つて片言隻語を放たざりしもの急に高談放語を恣にするあり或は車窓に凭り吾醉ふて眠らんとす君且つ去れと云ふ態度にて華胥に入るものあり或は某君の如き駄洒落亂出し聴く者頗る惱まされ席を移して之を避くるに至つた足尾鐵道は大正元年十二月三十日開通せる二十六哩の鐵道にして山麓を縫ひ渡良瀬川十里の峽谷を沿ふて走り斷崖絶壁を辿る峽中の奇勝は眞に天下の奇觀の山なるも時已に夜に入り暗黒窓外を見るべからず其の絶景は歸途之を賞する事にした

汽車の終點間藤の一驛前足尾に着するや一行中の老人株十六名は下車して此所の掛水館に宿泊する事にした殘餘の年少者(比較的)二十四人は間藤驛に下車するのである此停車時間に天下の大事件が起つた夫は一行中の某君が醉眼朦朧として頭腦を以て硝子窓を突破せる珍事である蓋し閉ぢたる窓を開放せるものと誤想し急に顔を出さんとし硝子に衝突したのである凄まじき音響を發したる時は何事の珍事ぞと一同耳目を聳てた幸にして某君は烏打帽子を冠り居りたるを以て些の負傷をも受けざりしは望外の幸福であつた

九時二十分間藤驛に着くや足尾鑛業所より特に接待員諸氏の出迎を受け指定の旅宿暢和館迄馬車を準備されたるは恐縮の至りであつた旅宿に着くや抽籤を以て室割と入浴順を定め入浴を終るや一同二階の大廣間に集まつて麥酒の栓を抜いた褌袍を着て大の髭男が車坐に坐つた體態は恰も山賊の酒宴にも似たり舞臺も恰度足尾の山間になど獨り悦に入つて居るものもあつた記者は幸にも八疊二人組の籤を抽いたから竊かに早く逃去て床中に入つたから其後の狀況を知らざりしも盧生の夢を結んだのは八日の午前一時半であつた

八日早曉より山雨蕭々として到り峽谷杳々咫尺を辨じ難く到底視察を行ひ得べくもなかつたが

兎も角昨夜決定の六時に一同起床廊下に立てば雨稍其勢を減じ直に窓外に迫る巒峯の翠色滴ら
ん如く所謂鑛毒の爲め草木尠なき突兀たる峭壁も幽澗或は碧瘦を留むる處あり記者の如き常に
紅塵萬丈裡に醜礙たる身には眞個に神氣爽然たるを覺えた此降雨にては到底充分に巡視見學を
遂ぐる能はざるも斯く雲山一幅の此の活畫圖を窓外縦に望見し得るは之にて足尾旅行の目的を
充分達し得たと云ふ者もあつた

七時朝食綠滴たる木芽田樂に舌鼓を打ち足尾驛に宿泊せる一隊の馬車の來るを待ち八時一同山
雨を衝いて馬車に乗つた昨夜は暗中足尾に入りたるを以て四圍の何物をも觀る事が出來なかつ
たが今本山に向つて走りつゝある馬車の窓より洞見するに人家櫛比大厦高閣其間に介在し商估
亦見るべき店舗を構へるあり銅山の規模頗る雄大にして此かる深山幽谷に這般の偉大なる壯觀
に接せんとは何人も想像の外であつた

本山は古河翁最初の鐵槌を揮ひたる鑛山にて此處には製煉所と彼の鑛毒問題に有名なる新設の
煙道装置を見た先づ煉銅工場にては熔鑛爐より迷出する赤熱の銅液に血を躍らせ又コンパータ
より天外に昇騰する紅蓮の火焰に魂を奪はれて其壯烈の光景に一種の威壓を覺えた次に煙道裝
置を見た是は明治四十五年農商務省の命令に基づき從來足尾銅山に試みたる研究を基礎として
歐米の進歩せる煙害排除設備を斟酌し現今の最善方法を應用せるものにて二個年の年月と數十
萬の巨費を投じて漸く昨年八月竣工せるものにて構造は總て鐵筋混凝土にて其壯大なる灰白色
は恰も城壁の如く或人は伊太利羅馬に遊ぶの想があると謂つた

之より再び馬車に投じて通洞に至り選鑛場を視た足尾銅山一日の粗鑛量は千七百噸と云ふ莫大
なる鑛石である之を一々精粗夫々選鑛區別するは容易な業でない此所には乾式と濕式の兩様の
選鑛機械があつて其千態萬狀の機關は頗る興味ある裝置であつた之より玉村式索道壓搾空氣室

ジゼル機室及鑿岩機室等を見て豫定の視察を終はつた本日の視察には所長代理小島工學士及其他諸氏が自ら案内者となつて一々詳細なる説明を與へられたるは一同の深く感謝する處である特に曉來の滂沱たる濛雨を冒して先導の勞を取られたるは謝するに辭がなかつた

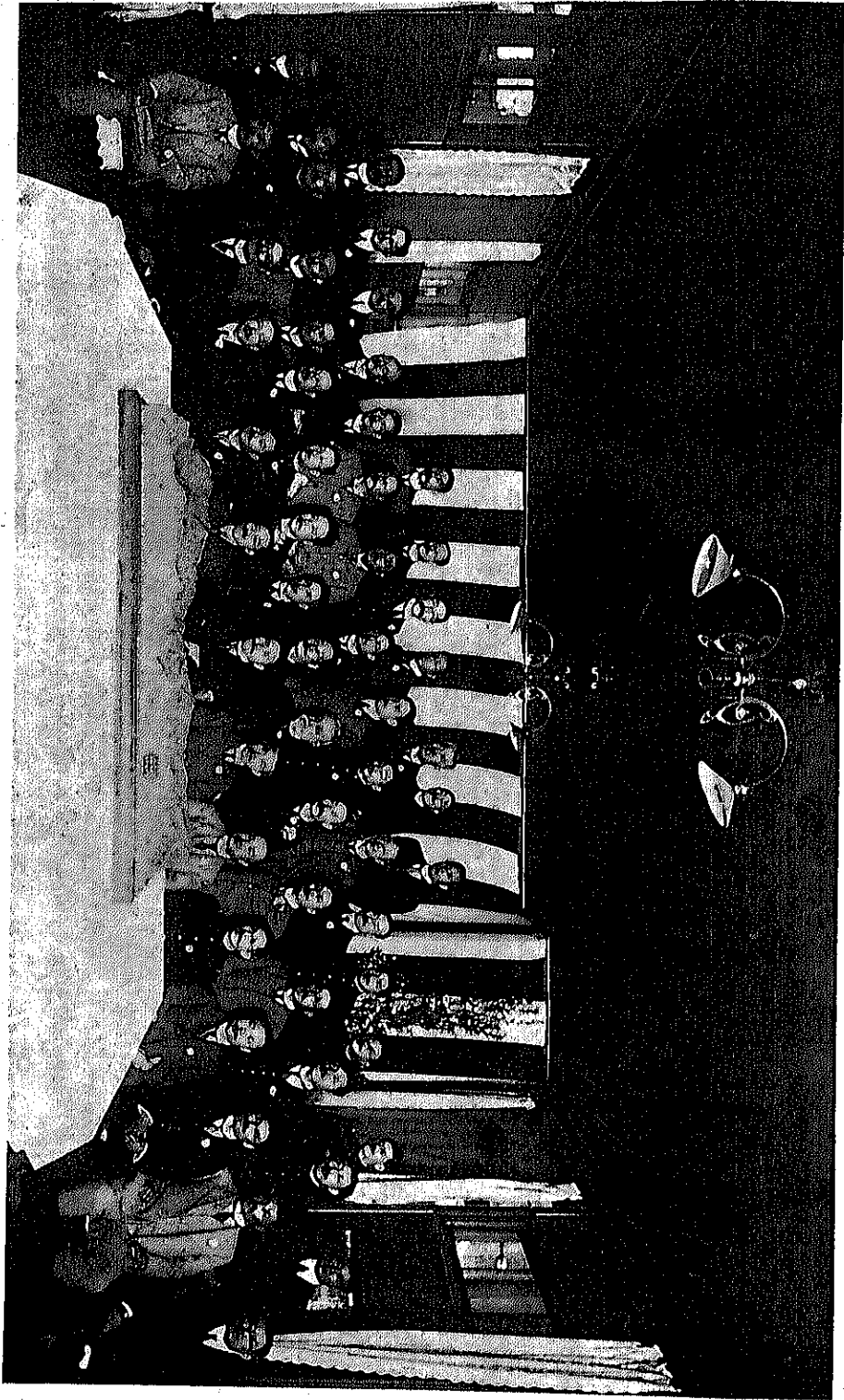
正午一同掛水館に集合して午餐の卓に就いた爰に小島君より丁重なる挨拶を受けた同君曰く足尾鑛業所は古河翁の巨腕に由つて常に最新最善の諸機關諸設備を應用し本邦に於ては他の鑛山に率先して最新方法を採用し翁の歿後も其意志を繼承して尙倍々活動發展を努むるが今日土木界の諸氏が多數相率ひて來觀せられたるは大に歡迎する所にして鑛業界に於ける土木は甚だ緊要なる事業なるを以て敢て高教を仰ぐを得ば幸也と述べ之に對して古市博士は答辭を陳べて曰く足尾鑛業所は嘗て其利する處は擧げて盡く其改良設備に費すと云ふを聞けるが今之を實見するに當つて果して其然るを知れり今や歐洲の戰亂其終熄未だ何れの時に在るを期すべからず我邦の戰後經濟上の變動亦容易に逆睹すべからず足尾鑛業所は今や盛に戰時必須なる銅を製造しつゝあり國家の爲め甚だ有益なる事業たるは論ずるまでもなし願くは益々活動努力邦家の爲め盡瘁を乞ふ這回は又萬事非常なる歡待を受け充分に視察の目的を遂げたるは一行に代つて深く鑛業所諸君に謝する處なりと述べられた

食後一同寫眞(別紙)を撮り芳名錄に各自氏名を記し鑛業所諸氏に別れを告げて午後三時發の汽車に搭じて歸途に就いた川地君再び同車一行の爲め諸般の斡旋盡力の勞を取つた同君は此足尾鐵道起業の任に當り工事を完成せる人なれば起業當時の困難譚より沿道各地の狀況を語る事頗る懇切精細を極め特に君は大に話談に巧みにして時に諧謔を交へ大に一行の旅情を慰せしめた然るに君が得意に足尾鐵道の爲に氣煩を吐きつゝ有るの時俄然として汽車が停止した之は線路切取の側面より三百才大の大岩石が墜落して線路を閉塞したのだと云ふ此岩石を避けて線路を移

動する爲に五十分餘を費した之は恰度原向驛と澤入驛との間であつた此邊線路の兩側盡く岩石を以て成り特に澤入附近は總て花崗石の巨塊群を成して散亂し其量は極めて豊富であるから建築材として目下盛に各地へ搬出して居る現時東京市及附近に大に此渡良瀬花崗石を利用して居る澤入花輪神土の三驛の間は線路は渡良瀬川の斷岸絶壁に沿ひ山勢綿亘として翠を疊み碧を走らす處山光倒に水に眠り水影上りて山を搖かす如く山と水と相交り相攻め汽車の走るに従つて山容水態變幻を極め眞に天下の奇絶である此の重嶂溪谷を突貫し終れば汽車は兩毛線の桐生驛に着く墜石事件の爲に此處の聯結換の時間を失したれば之よりは小山を經ずして一路高崎線を取つて歸京する事にした爲に着京の時間は三十分を遅引し十時上野着と云ふ事になつた

桐生驛を發車する也折詰辨當を開き麥酒を傾け始めた最う東京へ歸へる己と云ふので大に滿を引く者あり驅て歡飲高興を催し酣醉陶然たる者もあつた昨夜破窓事件の某君も亦聊か醉歩蹒跚となつた同君が起立車窓に近くや側坐の者は又君が昨夜の過を再びせんことを恐れ倉皇同君を擁抱する等亦一種の滑稽劇である同君破窓事件を題せる狂歌俳句等續々詠出され次に某博士の鼾聲雷の如きを詠んで之を回覽し嬉々たるものあり昨夜の歡談興快にも優りて興趣益々加はり汽車の上野に着く時間の寧ろ遅引せん事を希ふものあり過刻の墜石の早く除去復舊せられたるこそ却て怨みなれなど啣つものもあつた汽車は定刻十時に上野に着いた茲に再び小田川博士の出迎を受けしは感謝の辭がない

爰に無事に二日間の旅行を了つた東京出立より歸京迄一行の蒙つた足尾鑛業所諸君の歡待は實に非常なるものであつた爰に深く其厚意を謝して足尾鑛業所の益々振興發展せんことを祈る



團

行 旅 察 視 尾 足

(影 據 日 七 月 五 年 五 正 大)